

た経営戦略が活きている。高級ブランドイメージを武器に市場参入する方式で、これを称して「階層限定型戦略」という。中国社会も階層分化が進行してきており、安いというだけでは売れない商品もある。次に販売する地域をしぼる方式である。これをもって「地域限定型戦略」という。例えば、華東地区の上海、江蘇、浙江だけで2億近い人口を擁し、日本以上である。何も中国全土に販路を広げる必要はない。

最後に、中国との事業を展開する日本企業が問われているのは、日本的経営体質、経営方式のあり方である、といった視点を欠かすことはできない。

国際カヌー大会通訳

現代中国学部
藤森 猛

4月27～29日、「2001三好カップ国際レディースカヌー大会」(愛知県カヌー協会・三好町主催、日本カヌー連盟・中日新聞社共催、国際カヌー連盟公認)が三好池で開催され、世界10カ国の選手37チーム、167人が競技に参加した。この外国選手チームの出入国・宿泊・練習・競技・セレモニー・監督会議・表敬訪問・ショッピングなど1週間の全日程に、現代中国学部学生23名が通訳として従事した。現中国学部生の国際カヌー大会への通訳としての参加は、1999年、2000年に続いて3回目であり、本年は中華マカオチーム、韓国チーム、中華台北(台湾)チームを担当した。

(1) 外国選手の受け入れ

例年、多くの学生が初めて通訳を経験する中で、一番緊張するのが名古屋空港への選手・監督の出

迎えである。特に中国語の場合は、例えば、一昨年の福建チームの時は福建語、昨年の上海チームの時は上海語というように、その出身地によって使用する方言が異なり、また選手団がどこの出身かを知らずに通訳を担当することになるので、なおさら緊張に輪をかけるのである。今年の場合は、純粋な広東語を話すのがマカオチームであり、福建語(閩南語)を話すのが台湾チームであり、さらにロシアチームの監督は台湾出身であり、福建語と英語を話した。

学生さんたちは、最初の一言を何と言って出迎えたらいかが悩むようであるが、「你们好!」(こんにちは)、「欢迎来到名古屋!」(名古屋へようこそ)と言うことができれば十分である。今年のマカオチームの乗る飛行機は到着の予定が変更され、20:55分着となり、台湾・ロシアチームと合同で出迎えることになった。マカオチーム担当は3年生の金海亜来さんであり、選手たちを多少引きつった笑顔で迎えることになったが、わりと度胸がすわっていた。宿泊地である「丰田世紀飯店」(豊田センチュリーホテル)まで大会役員らと同乗し、明日以降のスケジュールを監督に伝えた後に、初日の通訳業務を完了した。

(2) 表敬訪問

外国の訪日団を迎える際に必ずスケジュールに組み込まれているのが、受け入れ団体への表敬訪問である。国際レディースカヌー大会では三好役場の会議室において、三好町長、国際カヌー連盟の役員などの前で、各国の監督が挨拶をして、担当の通訳が日本語に同時通訳する。スピーチ通訳においては、原稿が予め準備されている場合とそうでない場合、一言一言区切って同時通訳する場合と最後にまとめて通訳する場合など、通訳の方法が異なる。通訳に求められるのは、一つには日時・場所・人名などを正確に伝えることであり、また一つには“長すぎず、短すぎない”的確なコメントである。

例年の各国チームの代表者スピーチにおいて、アメリカ・ニュージーランドなどのスピーチは、

プライベートな感情をわりとストレートに表現する傾向があるのに対し、中国・台湾・韓国・ミャンマーなどのスピーチは、チームとしての謝辞を重視する傾向がある。中国語スピーチの定番としては「尊敬的 先生(尊敬する 様)でスピーチを始め、段落の終わりに「我代表 表示衷心的感谢!」(私は を代表いたしまして、衷心より感謝申し上げます)という謝意を挿入して参加者からの拍手をいただくことが多い。

さて、同時通訳を行ったのはマカオチームが4年生の土井綾香さん、台湾チームが3年生の小出有香さん、韓国チームが3年生の禹相栄君である。それぞれが初めての同時通訳であったため、傍らに座るこちらの方もときどきしたが、なんとか無難にこなし。スピーチ通訳は、あまり細かいことにとらわれず、堂々とゆっくり話せばよいのである。

(3) カヌー競技大会

競技前日には練習、技術講習会、監督会議、開会式等のセレモニーが行われる。特に競技ルールを確認する監督会議の通訳の際には、カヌーの専門用語を200語近く知らなくてはならない。毎年、学生さんたちには中国語のカヌー語彙集を事前に配布するのであるが、競技そのものを日本語で理解していないと通訳は難しいものとなる。また例えば中国語のカヌー用語においては、カヌー(カヤック)のことを中国大陸では「皮划艇(皮艇)」

台湾では「轻艇」、マカオでは「独木舟」と呼び、地域によって専門用語に若干の相違があることにも注意しなくてはならない。

さてカヌーレース競技は、第一日目が500メートル競争、第二日目が200メートル競争であり、それぞれ「単人皮艇, 単人皮艇, 単人皮艇」(シングル、ペア、フォア)の3種目において、「预赛, 半決賽, 決賽」(予選、準決勝、決勝)が行われる。通訳の主な役割は、各レースの30分前の「检录」(配艇: 最初のエントリー受付)において選手を的確に誘導し、レース後に「船艇检查」(検艇: 艇の重量検査)を選手に指示し、さらに監督・コーチのクレーム・要望などを大会本部に伝えることにある。今年の競技大会当日には、各チームにそれぞれ4人の現中学部生が通訳として同行した。

今年の大会では中国大陸チームが参加しなかったこともあり、競技はハンガリー・ドイツ・アメリカなどの欧米チームが上位を独占した。K - 2 (カヤック・ペア)で優勝したハンガリーチームを「Congratulation(s)!」と言って祝福すると、選手たちがとても喜んで握手で応えてくれた。また日本を含めてアジアのチームでは、唯一韓国チームがK - 4 (カヤック・フォア) 500メートルにおいて3位に入賞したが、この時ばかりは学生の人たちと一緒に「힘내라!」(頑張れ!)と応援した。また大会第二日目は雨が降り、競技場の池はかなり寒くなっていた。4年生の高ヶ内麻美さん、木村知美さんらのアイデアで、通訳の4人の愛大生が着用していた揃いのピンクのジャケット4着を、台湾チームの選手4人にユニフォームとして提供した。小雨の中で、ピンクのジャケットを着用した台湾チームのフォア艇が入賞した。

通訳の活動は、単に専門的な外国語の語彙を知っていればよいのではなく、第一に朝から晩まで活動できる体力、第二に雰囲気や和らげる笑顔、第三に相手を気遣う思いやりが必要である。このことを1週間にわたる愛大生の国際カヌー大会通訳に同行して、あらためて学ぶことになった。



カヤック・フォア500m (マカオチーム)